

土 淨

號 月 九

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可〔毎月一回一頁〕
昭和十八年八月廿日印刷納本・昭和十八年九月一日發行

第九卷 第九號



在 舟
九

安西覺承著

新刊 法然上人の和歌

B 6 版六十四頁 定價五十錢 送料四錢

まことにわが祖法然上人は天成の歌人であられた。その和歌はどこまでも歌としての美しさに輝く歌である。調子のよさ、格律の正しさ、技法の緻さ——實に立派な歌品であつて、優にこれを當時の一流歌人の勞作に比することができよう。(著者の言葉)

法の歌によく上人御遺徳の結晶をみる。

み詠こそ上人のお姿であり、み教へてある。上人の御作として確實な和歌全部(二十首)について一々懇切な語意、通釋、感想をのべ、金玉の詞花がそのまゝ讀者のものとなる定本である。

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
總發東京八二一八七番

陸海軍病院 慰問「淨土」應募のお勧め

白衣の勇士に

法味を捧げよ!

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月新刊の信仰雜誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士に法味を捧げ、大變喜ばれてゐます。

◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。振つてこの聖き運動に隨喜して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務變部宛に！領收の證には宗報及び「淨土」の誌上に御芳名を掲載します。

◇多數の陸海軍大臣の感謝狀、勇士からの謝狀がこの意義ある運動の全貌を語つてゐます。

申込所

淨土宗務所

東京市芝區芝公園明照會館
總發東京一五一一一番

第九卷

第九號

法然上人御法語

人身じんしんのうけがた
きことはりをおも
ひて、このたびむ
なしくやまん事ことを
かなしめ、六道を
めぐるに、人身じんしんを
うくる事ことは、梵天ぼんてん
より縁えんをくだし
て、大藏だいざうのそこな
る針はりのあなをとを
さんがごとしとい
へり。



淨土九月號 目次

表紙「夕月」・目次カヅト……………跡部白鳥

震災の
教訓 協力の底力……………小山喜一郎(二)

死生ともにわづらひなし……………大野法道(八)

立 秋……………吉田絃二郎(四)

學生の死を報ずる手紙……………和田正系(三)

赤道を過ぎて……………湊邦三(七)

海軍さんと手紙……………長谷川伸(三)

折にふれて詠める(歌)……………岩野喜久代(二)

俳 壇……………太田耳動子選(七)

とし子を授かる……………岡本一平(六)

宗義
隨筆 とんちん物語……………糸山天真(四)

法説
隱説 心行相助け進む……………中村辨康(五)

編輯 後 記……………(三)



協力の底力

— 關東大震災のよき訓へ —

海軍技師 小山喜一郎

國を擧げての戦ひに前線も銃後も何等區別のあらうはずはない。南太平洋で日夜繼續されてゐる決戦に、質ばかりでなく量に於ても敵よりはるかに優れたあらゆるものを前線に速かに送ることが銃後の努めであり、この點で敵米國との銃後の決戦が漸次熾烈化しつつある。それがためにわれわれに己れを空うしての協力と渾身の努力とがなくてはならない。また敵の呼號するわが本土爆撃に對しても挺身的な旺盛なる戦意と敢然たる勇猛心とが必要である。施設が完全でも没我的協力なしに防空なしと思ふにつけ、私はいつもかの關東大震災の折、猛火に包圍されながら町民の一致協力によつて災禍を完全に防ぎ止めた敢闘の佳話を思ひ出すのである。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如襲つたあの大地震は、一震二震と家々を打ち倒して行き、それと同時に數十ヶ所から火の手があがつた。これは逃げる時に火元を處置しなかつたからである。人々が皆避難してしまつた後には、バラバラに壊れて燃え易くなつた家々だけが残つてゐたのであるから猛火が在分暴れ狂つた

のも當然であつた。夜に入るとますます紅蓮の焰が天を染め、はぐれた子を探し親を求める悲痛な叫び聲が街に満ちてゐた。昨日までの繁榮は何所へやら一面荒涼たる徳野原と化して、その中には點々と焼死體が轉つてゐた。隅田川には死體が婉々と連り、本所被服廠跡には實に幾萬の避難民が死んでゐた。

ところが只今、私の住む隣の町であり、私の生れた土地の人々は八方にがあがつた黒煙をみても決して避難をしなかつた。反つて敢然と猛火に挑みかゝつて慘害から町を救つたのであつた。即ち神田區佐久間町一丁目三丁目、四丁目の全部、平河町全部、和泉町、佐久間町一丁目の一部、松永町の一部、下谷御徒町一丁目の一部の人達がそれで、現在「町民協力防火守護之地」として史蹟となつてゐる。この人達はゆるる大地に足踏みしめながら、家を護らう！町を焼いてはいけない！と誰云ふとなく叫ぶ聲に、さうだわれわれの手で町を救ふのだと決心したのであつた。

先づ第一に足手まといの老人小供を上野の山に避難させた。さて

次に防火といふことになつて水道が止つてゐることに氣がついた。幸ひすぐ裏に神田川が流れてゐるので、氣のきいた若い者が櫓子を持ち出して川へ下ろした。すると他の一人は素早くバケツを持つて降りて行つた。誰に命ぜられたといふわけではないが、鉢巻やら頬冠りやらの男女がすぐに集つてきて早くも川の水がバケツにくまれ手から手に、そして最後にとんでくる火の粉にかけられてゆくのであつた。また川から遠い所では平常は忘れられてゐた井戸の水が汲みあげられてゐた。八方から飛んでくる火の粉が此や羽目板をこがし始めた。濡れ布圍や濡れむしろで叩き消してゐる人もあり、生豆腐をつかんで投げつけてゐる豆腐屋もあつた。簀を濡して軒下で消しとめてゐる女もあつた。

秋葉原驛を燒きつくした焰が猛然と覆ひかぶさつてきた。電車道に山と積まれた家財道具に火がついたら大變である。人々は夢中になつてその荷物を片端から火の中に投げ込んで行つた。それで電車道が火を防ぐ空地になつた。それから二階の陽上げ、大きな看板、屋根の物干台等火のつきさうなものから外して叩き壊した。一方美倉橋方面では他から持ち込んだ荷物が橋の上に高く積みまれ、道具を満載した車が立往生したりしてゐた。これ亦危険極まりないものである。欲を張つてゐたら皆が全滅である。思ひ切つて荷物を川の中に投げ入れてしまつた。また大工と鍛冶屋が家の破壊作業を擔當して、火道を斷つてくれた。それでも危険は刻々に迫つてきた。

その時誰かがボンブ屋にあつた一台のボンブを見つけて引き出してきた。ガソリンがないので油屋から石油を持つてきて始動したところ不思議にもボンブが動き始めた。周りの人達から思はずワツと喚聲があがつた。

かくて猛火と圓ふこと三十餘時間に及んだ。警察官、在郷軍人、青年團員、町内會員、婦人會を初めすべての人があらゆる力を合せて全くの一塊りとなつて働いた。飲まず食はずの活躍を続け、三日目の曙方になつて、やつと町の周圍に火の手がなくなつた。隣接地が全部燃え切つたからである。かうして灰塵の曠野に一點生きのこつた島のやうに千六百三十戸が護り通されたのであつた。そればかりでない、神田川に建ち並ぶ倉庫にぎつしりつまつた一萬三千俵の米が、その後どの位罹災民救済に役立つたかわからない。

若しこれらの人々が火を恐れ、物に執着し、自分だけが助からう等といふ心であつたとしたら、結局は物を失ひ生命までなくしてゐたのである。協力一致のある所に云ひ知れぬ底力が發揮されるものである。毛利元就の三本の矢の訓べは三本でさへ大きな力になることを教へてゐる。それが現在では三本どころか千本となり萬本となつて敵に當らなければならぬ。敵撃滅の日まで何んなことがあつても協力の強さをゆるめることは出来ない。例へ空襲があつてもわれわれ一人残らずが敵を恐れず信念を以て身を挺して打ちかつてゆきさへすれば自づから勝利の途が開けるのである。(文責在記者)



立

秋

今日は立秋である。暦の上の文字で最もなつかしい文字である。立秋とともに懐かしいのは立春である。日も日も雪にとざされ、火桶の炭火に春を待つ心にとりて立春といふ言葉は大きな希望と明かるさである。立秋の持つ味はやゝそれと異つてゐる。三伏の暑熱から救はれたといふ他に、もつと本質的な、もつと静かなものが潜んでゐる。やがて近づいて来る蕭條たる静思の季節に對する儼かな哲學的、宗教的な心構へである。

立秋の涼風の立つ刹那、わたくしたちは靜かに魂の底に訴へる悠久なものを感じる。

「身が引きしまる」といふ言葉があるが、秋風の立つ朝わたくしたちは、たしかに身の引きしまる感じを覺へる。この感じを深く掘り下げて見れば、心に悠久なものの影を映し出してゐることに氣付くであらう。身

吉田 絃 二郎

が引き緊まるといふことは同時にわたくしたちの生活が魂の生活にはひとつたことを意味する。

人間の魂の生活には、それにふさはしい雰囲気が必要である。環境が大切である。修禪には禪洞の淨域がなくてはならぬ所以である。釋尊のやうなお方でも修行のためには雪山にお入りになつた。

日々の行爲即ち禪であるといふ人がある。たしかにさうである。しかしそれは悟り得た人のいふことで、修行する者にとつては、せめて禪洞淨域に近いものを持つ必要がある。

自分の狭い一室でも結構である。禪洞に近い簡陋蒼古な感じのものに整へて、そこに坐ればよい。一炷の香、一莖の野花、一吹の秋風、もうそれだけで禪洞の氣分は充分である。

古人の書を読むも可、讀まざるも可、靜かに禪洞に



跣坐して秋風を聴き、秋の聲を魂の底に感すべきである。

秋の風の吹くところ書齋も、病室も、事務室も、工場も禪洞に化する。車上、船中、悉く淨域化する。

飄然として一步門を出でて秋風に吹かれんか、そこにも禪洞はある。巷頭、路傍、悉くわが禪洞である。

この心構へができあがつた時初めて行住坐臥ことごとく禪的生活であるといふことができる。秋風は一切のものを禪洞化する。

今日からは秋である。秋風が吹き初めた。日本國中が禪洞に淨化される。日本國中の一人一人が秋風の聲を魂に感じなければならぬ季節である。

×

今朝からは秋であると感じただけでも生きてゐることをありがたく思はないではをれない。朝早く庇を打つものゝ音に眼をさました。時雨のやうなものゝ音である。じつと聴いてゐる。このころ夜毎日毎に落ちる夥しい樺の實の軒を打つ音である。

秋は眼に映るよりも耳に感ずることが多い。目にはそれとは見えないが、心に感ずることが多い。秋は何

處までも魂の季節である。

秋風を聴きながら人はさまざまのことを思ふ。内面的な生活にはひつて行く。まして今日の苛烈な戦局である、秋と共にわたくし共の生活は内面的に深さとゆたかさを増して來なければならぬ。防空壕を掘りながらも、わたくしたちの心はゆたかであり、明かるさを持つてゐる。いつの間にか生死の悟りに近いものを見出してゐる。わたくしは裏の竹山の孟宗竹を伐つて防空壕の屋根を掩ひ、その上に土を懸けて、芙蓉を植ゑることにした。芙蓉は八月の日の光りを浴びて勢よく軟かな葉を秋風にそよがせてゐる。やがて防空壕は可憐な芙蓉の花につつまれることであらう。芙蓉の花につつまれた防空壕もわが禪洞である。

街を歩いてゐると千人針を縫ふ女たちの姿を見る。針を運ばせてゐる女たちの眼は一樣に、この大きな國難に對する死に身になつた者の心強さ、たのもしさを見せてゐる。巷頭に、鈴懸の列樹の下に、黙々として千人針を縫つてゐる人たちの姿を見れば合掌しないでをられない。日本の歴史上、今日ほど強く國民全體が一つに結び付いた時代はないであらう。



また大學生や、少年たちの空の決戦を志して行く決然たる志に自づと頭が下がる。今日の青年ほどはつきりと國家の運命を身に感じた青年はかつて見出されなかつたであらう。

今日の青年たちの空に行く純一な神のごとき尊いところを拜むことを忘れてはならない。

わたくしたちはありがたい世に生まれ合はせた。禪洞に入つて三十年五十年の修行を積んでもなほ見出し難いものを、空に征く青年たちはその生活に於いて見せてくれた。

わたくしたちの子供時代には想像もされなかつた英雄的な行爲が紅顔の少年たちによつて、日も日もくりかへされてゐる。

かくのごとく人間の偉大な姿を見ることが出来る尊い時代がかつてあつたであらうか。

ことは裏の畑に小壽鶏が来て毎朝トマトを荒らしてゐる。小壽鶏といふのは雉子の一種で、このころは武蔵野にも、相模野にも大分繁殖してゐる。

かつて信州の高原で雉子にキヤベツ畑を荒らさるゝ話や、伊豆や丹波あたりの人が猪に畑を荒らさるゝ

話を聞いたことがあつたが、そのをりはそれほどびつたりと心に感じなかつた。このほど毎朝トマト畑を小壽鶏に荒らされるやうになつてから、はじめて山の人たちの心を察することが出来るやうになつた。人間の心の感じ方といふものは、まことに狭いものである。しかしわたくしの感じ方は農夫たちのそれに比べるゝと浅いにちがひない。わたくしは雉子をいたづらものとは思ふが、それ以上の憎みは感じない。生活の差である。

親に死別した人でなければほんたうに親を失つた悲しみを知ることができない。わたくしの祖父は九十三歳で、父は八十六歳で歿した。しかしわたくしは父が長命であつたとは嘗て一度も考へたことはない。せめて祖父と同じ齡まで父を生かしたいと思つた。この心持ちは親を失つた人でなければわからないであらう。子を失つた人、夫を失つた人の悲しみは、その人でなければわからない。その悲しみを味つたことのない人は、雄辯に弔辭を述べることが出来る。一度その悲しみを味つたことのある人は黙々として合掌するのみである。



病院に入つて初めてわたくしたちはそこに十年十三
年の闘病生活に生き耐へてゐる人の存在に氣づく。
以上健脚であつたわたくしはかつて歩行の困難な
人に對する深い思ひやりを持つことができなかった
た。このころ切符を買ふにも手の不自由を感じ、
東京に出るにも脚の不自由を感じるほどの體にな
つて、はじめて同じ病に在る人の惱みを察するこ
とができるやうになつた。

わたくしたちは自分の浅い経験のために、不知
不識の間に、人の苦しみに對し、悲しみに對して、
思ひがけない罪を犯してゐる。

庭の隅に吾木香や萩や木槿の花を見るやうにな
つた。そこには昔のまゝの靜かな日本の秋の感覺
が動いてゐる。木の間を洩れて来る縁側のかすか
な日の光りも、そこにたゆたふてゐる空氣の感觸
までが、昔のまゝな秋である。

わたくしは庭に立つて、昔ながらの秋の大氣
に浸されては、永劫に還り來ぬ人たちの面影を思
ひ泛かべる。人間のみが靜かな秋に歸つて來ない
ことの不思議に思はれる程、空の色も、雲の姿も

風の聲も昔のまゝの秋である。
只一筋の思ひを寄せて人は秋風の中に佇む。

俳壇 太田耳動子選

閑古鳥晝寢の夢をさましけり

宮崎陸軍病院 大塚 光高

窓越に夜焚の明り一文字

獸めく木立に螢光りけり

高知縣 竹原 教園

東京都 山本 竹泉

夕風の颯々として月見草

東京都生れぬ扇白々と

兵庫縣 山本多可子

浦和市 瀧川 信雄

梅雨しぐれざくろの花の鮮やかに

袖子の花仰ぎてつかれおさめけり

福岡縣 村上 靜夢

誘蛾燈ホツ／＼村のありところ

決戦にささげまつりし田植かな

群馬縣 大塚 晩震

奈良縣 野島ひさし

ふるさとの水美しき田植かな

學問のつむりに狂ひ火取蟲

横濱市 齋藤青橘子

名古屋 熊澤 秀國

満ち足りし晝寢風鈴ひびきくる

つんである有松絞雲の峰

今治市 三木 光子

いささかの雨はいとはぬ茶摘かな

明日は征く人の風鈴出してつる

三輪町 岡田 白水

京都市 近藤 青牛

慰問使の日焼の顔や親しけれ

花欄に朝の寢覺の深かりき

東 京 田邊 越山

うどんげや人の心のたのみなき

雨あがる椎の若葉のあかるさよ

在原區 木岡 壽利

北海道 花田 順往

芋の葉の露ほろ／＼と風に逢ふ

事繁き身にも待たれし月見かな

青森縣 丸尾 傳山

投稿規定

官製ハガキ一四二句以内、静土郵便部併置係宛に送ること

死生ともにわづらひなし

歎 佛 偈 講 義 (十四)

大 野 法 道

我れ、まさに一切を哀愍し度脱すべし

之は第十六偈の後半である。淨土の徳が、

五つに分けて説かれる中の第三であつて、つ

まり、すべての人々が、佛ごころに育てられ

る世界が淨土であるといふのである。

人の子は、子を思ふ親の一心に育てられて、

すく／＼と大きくなつてゆく。學校へ上つて

は、先生の力で育てられる。國民としては

大君の御力、お國の力を受けて、立派に成身

して育つてゆく。

そのやうに佛は、一切の人々の宗教的に求

を育て、成就せしめられるのである。その
育てられることを「哀愍」と「度脱」の二つ
に分けて説いてある。

その第一は、「佛心とは大慈悲これなり。無

縁の慈をもつて諸々の衆生を攝したまふ」と、

觀無量壽經にあるやうに、全く宗教的な親心

で、あらゆる人々を我が心に攝められる、い

つくしみが哀愍である。第二は、人々が苦し

みから解脱して、安樂になることが度脱で、

度とはわたるといふ意味である。生死の苦を

渡り超えて、涅槃の樂を得ることであり、佛

が自ら解脱して、人々の解脱の道を開かれた

のが、「一切を度脱すべし」である。
人々を本當にあるべきやうに、立派に育て

てゆくのが佛心であるから、それを信仰して
生きてゐる人は、おのづから育つ世界として
の淨土のよるこびが、感じ味はれることにな
る。

二

人々の育つすがたである解脱は、多くの宗
教の中でも、佛教の特色とされるものである
から、こゝで少し解脱について考へてみる。

誰にしたところで、苦しいこと、困つたこ

と、いやなこと、好きな筈はなく、何として

もそれから逃れる事を欲するのであり、喜ば

しいこと、楽しいことを求めるのであるが、

苦をそのまゝにして置いて、外に別に樂を求

めようとするのは、逃げ出すものである。か

うして得た樂には、その後、苦が隙を伺つて

待ち構へてゐる。またこの講義の第十一回の

今ぞ意味ある「地獄の繪」に述べたやうに、

どこまでも苦が後から追つかけて来る。之で
は本當の樂にはならない。
苦を正しく解決し、苦の息の根を止めて、

苦に追つかけられるやうなことのなくなつたのがけだつである。解脱は盡苦であり、苦の超克である。そこには最早や、苦の苦とすべきものはなく、たとえ楽しく喜んで生々してゐる世界がある。

「苦は樂の種」といふ言葉がある。

之はつらい事でも、將來を樂しみにやり抜くことを言ふたものとすれば、苦を原因とし、樂をその結果とするのであつて、そこには苦の中に樂の芽ありとする、苦に對する一つの解決には違ひないが、やはり、苦の外に樂を求めてゐるのであるから、將來に樂を得た時に行き詰らぬとも限らない。そこで一歩進んで、苦を苦と思はぬ樂を知りたいものだと思ふ。

苦の結果として樂があるのでなく、苦の中に樂を見て、どこまでも進んでゆくのである。

この心持ちがあつたなら、どこまで行つても行きづまりはなく、再び苦の世界へ逆轉する恐れもないであらう。こゝに苦の徹底した解決があり、解脱の生きてゐる姿があり、眞

の樂みがある。

三

苦を苦と思はぬ樂みを知るについて、蓮月のよい歌がある。

宿かさぬ人のつらさを情にて

おぼろ月夜の花の下ふし

といふのである。これは筆者が愛用してゐる蓮月作の急須にさらさらと、いかにも解脱の心境さながらの筆致で書かれてゐるのであるが、見やうによつては負けをしみとも見えるであらうけれども、蓮月にあつては、唯では得られぬ「おぼろ月夜

中村辨康著

近刊 信仰問答

價 三・〇〇
送 一五

著者が「淨土」誌上に創刊以來擔當してゐる「信仰相談」は各方面に非常な好評を博してをります。それは問ふ者は切實な信仰上の悩みや疑ひをぶちまけ、答へる者はそれを親身になつて懇切に指導してゐるからです。今こゝにその「信仰相談」中の主なもの約二百を選び系統的に配例して一冊の書物としました。故にこれは懇切な信仰の案内書であり、最も平易に書かれた佛教讀本であり、佛教辭典でもあります。著者の公正な立場は淨土宗たると他宗たるとを問はず、信仰を求め、教義を探らうとする人たちを首肯せしめるでせう。

九月廿日發賣豫定——最寄の書店へ御申込置き下さい。附近に書店のない方は直接本會宛送料をそへて御申込下さい。

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

の花の下臥しであつた。こゝでは一夜の宿さへ貸してくれぬ人の不親切が、いつか、又とは得られぬ樂しさを與へてくれた温情となつてゐる。しづかに詩境を樂しんでゐるだけではなく、苦は跡方もなくきれいに消え去つて、樂しく生きる宗教的な解脱の世界が、おぼろ月夜の花のやうに、柔かくしかもくつきりと浮き出してゐる。

前線の皇軍將士の生活

從來になかつた

乾燥野菜、粉末の味噌や醬油などを用ひねばならぬ不自由さが、苦でなくて何であらう。まことに相濟まぬ勿體ないことである。しかし將士自らにあつては、報國の一念に徹し、必勝の信念に燃えてゐる已上、この苦が苦でないばかりか、之で以て敵米英を殲滅する、何よりの樂しみの生活であるに相違ない。

たと前線の勇士ばかりではない。銃後の國民といへども同様である。戦時の生活が決して樂ではないことは、この長期戦の示す通りであるが、戦争目的の完遂を樂しみに、この苦を忍ぶといふのでは、「苦は樂の種」の程度

であつて物足りないのである。更に進んで、この苦が苦でなくて、大東亜の建設される所以の、樂しみになる所まで行くことができるのである。

そこには、苦を苦とする疲れ、瘦せ細りは跡を絶ち、苦に克つ樂しみが齎す張り切つた力量が作用して、日一日と確實に、大東亜の共榮圏は建設されてゆく。

四

げだつに行き詰りはない。

苦を苦と思はぬ樂しさには、苦の苦とすべきものではなく、生々として樂しむ解脱の世界があるのであるが、それを養ふものは佛教の信仰である。

なぜといふに、「人生は苦なり」であるから、さう易々と苦が苦でなくなるものではなく、苦を苦と思はず、超克したつもりであつても、なか／＼樂にはなり切れず、つき／＼に苦が出て来るのが本當である。佛の道は、さうした苦の出て来ることを承知して、來れ

ば来るだけいくらでも、それを克服してゆく所に解脱ありとするからである。

之が、苦を苦と思はぬ樂しさに具はる妙味であり、どこまで行つても行き詰らぬ解脱であり、げだつが生きてゐる所以である。もし全く苦の出で來ない、安閑とした一定の樂しみがげだつであつたなら、何の妙味もなく、行きづまりであり、死んでゐる。

何が來ても平氣なほど樂なことではない。出てくる苦の最大なるものは、生死に煩はされることであるだけに、その苦を苦とせぬ樂しさに覆る、大きい解脱はないであらう。

法然上人は、生けらは念佛の功つもあり、死なば淨土へ参りなん。とてもかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし。

と申された。皇軍將士は、生きては敵撃滅の第一線に立ち、死しては護國の神となる。死生ともに煩ひなき解脱こそ、こよなく尊き極みである。



折にふれて詠める

岩野喜久代

何なれば言葉^{ことば}を散らすもの多き武人^{ぶじん}もだして死にたまふ世に
 南^{みなみ}の空^{そら}まはゆくも照れるらむ破邪^{はじや}のみいくさ激^{はげ}しかる日も
 發動機^{はつどうき}さやかにうなり長官^{ちやうかん}の前^{まへ}すべりゆく畫^えを見つ泣く
 雙^{たわ}びなき名^なを得たまひぬ一^{ひと}すちの道^{みち}をつらぬき無^むに入^いれるのち
 みいくさの中に歌^{うた}よむ指揮官^{しやうくわん}を昔^{むかし}も今^{いま}も日^ひの本^{もと}はもつ

以上山本元帥を哭して

わが涙^{なみだ}わたくしごと^{ごと}に流れずて大御代^{おほみよ}のためおほくながるる
 初秋^{はつあき}や垂穂^{たれほ}の稻^{いね}を思^{おも}ひつつ都^{みやこ}にわれは汗^{あせ}を流^{なが}しぬ
 肅然^{しよくぜん}と様^{さま}を正^{ただ}して一日^{ひとひ}ありみいくさの世^よの内^{うち}外^{そと}思^{おも}へば
 秋^{あき}となりわが子^こ清^{きよ}らに見^みゆるかな白^{しろ}き芙蓉^{ふよう}のゆるる心地^{こころ}に

ビルマ建國を祝す

大空^{おほぞら}へ今^{いま}ぞ孔雀^{くぐやう}のはばたきて飛^とぶ日^ひとなりぬいましめを斷^たち
 夢^{ゆめ}ならず灰^{はい}の中^{なか}より蘇^{あふ}へる不死鳥^{ふしちやう}のごと成^なりしビルマよ
 あなめでたあな泣^なかまほし日本^{にっぽん}はありがたきかな國^{くに}をさへ生^うむ



海軍さんと手紙

長谷川伸

數年前のこと。

或るとき、或る建物のなかで、農事に關する技手と、醫者とが、わづかの閑を久振りに見つけ、かねがね好きな碁を圍んだ。暫くすると、醫者を迎へに、顔の色を變へた家人が、駈けこんで來たので、急患だらう、すぐ又くるからと、醫者はそゝくさと歸つて行つた。海濱の街でのごとで、その日は、今にも雨が降つてきさうな春遅い午後だつた。

技手はあすの事務に手廻しをして、計算やら記入をやつてゐると、やがて醫者が戻つてきたので、何気なく顔をみると、いかにもただならぬさまがあつた。病人だつたかと聞くと、いや負傷者だつたと浮かぬ様

子、鑑にむかひはしたが、碁石を手にとらず、どこかをちツと凝視した。怪我はひどいのかと聞くと、うんひどいにも何にも、右脚が折れて、その折れた方の脚の骨が、左脚を横に貫いてゐるのだと苦きつていつた。そんな大怪我をもう手當してきたのかと聞くと、そのことだ、×時×にならぬと電氣がこない、電氣がなくては手當がでないので電燈會社へ交渉したのだが、送電してくれぬのだから駄目だと、屏をひとと咬んだ。したがえらい男だ、痛いといはない、呻めきもしない、齒を咬みしめて辛抱してゐる、あの剛毅さは俺も永い間の醫者だが、今までにただの一人も出會つたことがない、さすがに日本の海軍々人だと

眉をつりあげていふ醫者の言葉に技手がえツといつた。海軍さんか、海軍さんがどうして又こんな處へ負傷してきたのだ。技手は背をしくいつた。

その街で海軍さんの姿を、ここ何ヶ月といふもの、見かけたものがないだけに、餘り唐突な氣が技手はしたのだ。

醫者がいつた。隣り村の瀧師がこの沖で、波間に黒いものが見える、はて何だらうとみると、人だ、しかも泳いでゐる。それ教へと暫き寄せ、抱きあげてみると水兵さんで、兩脚の血が潮に散つて紅糸から出てきたやうだつたといふ、それから全力を擧げて濱へ漕ぎつけ、俺のところへ瀧師が擔いできたのだが、と云つてゐる處へ電燈がつ

いた。時計をみると送電時間にまだなつてゐない。いふまでもない、電燈會社が手當用にとて電氣を送つたのである。

醫者は喜んで飛んで歸つた。技手もそれに續き、何彼と手當の外側の用を足した。

そのうちに街の人々が聞きつけて、何か用があつたら致しますと、始めは二三人だつたが、時と共に人数がふえた。

水兵さんが痛苦を忍んでゐる悲壯さに、

心をうたれぬものとなかつた。男だな、日本の男だな、よくも泳へてゐる、えらい水兵さんだ、と、街の人々はひそ／＼と云ひ交し、涙を浮べるものが多かつた。

手當が終つて暫くすると、どこからか救護自動車、凄じい勢で、この街へ躍りこんで来て、一氣に醫者の門前で停まつた。西の空に茜さす頃だ。

將校が一人、下士官兵が數人、車が停まるより先に、ひらりひらりと飛びくんだり、將校は醫者に容態を素早く聞き、街の人々には擧手の敬禮と注目をして、何ごともし

はず、負傷者の傍へゆき、たいした疵ではない、救急車がきてをるから歩いて早く乗れ、隊で應急處理をうけたら飛行機に乗せてやるから、原所屬に歸れ、判つたら起つてみる、と、かう云つた。醫者がその言葉の終らぬうちに、この怪我では歩くどころか起つことさへ不可能ですと訴へると、左様ですか、それでは、おい轎御で乗せてやるぞと、荒々しくいつて、下士官に眼配せした。下士官は直ちに兵を指揮して、負傷者を車に乗せた。

將校は醫者と街の人々に、言葉短に誠意のこもつた禮をいつて、きりツとした擧手と注目を、そこに居た人達全部にして、車にひらりと乗つた。

この自動車は街道に出て、驀然に去つてゆくすがたを包む黄昏のなかで、醫者と技手とは物もいはず佇んだ。何としても將校の様子にわが意を得ざるものがある。あれ程の重傷者にあんな荒々しい言葉をあびせるとは、苛烈過ぎると思つたのである。

その後、數日、技手が出張先で或る人にこの話をして、過失の負傷でもあらうが、それにしても、武人は荒いといつて咏歎した。或る人はそれを聞き咎め、それは違ふ。武人は情が濃かだ、さすがにわが大日本の武夫だ、あゝ立派だ、さすが日本の精華だといつたので、技手は驚いて何故ですかと些か詰寄り氣味にさへなつた。

かういふ事がありますよと、或る人が次の如きことを語つた。

幕末に或る藩で、討幕論者の士を、左幕派の士が暗殺にかかつた。刺客が短刀で刺さうとすると、間髪を容れず、胸に抱きつかれた、刺客は他に手の下しやうなく、相手の肩をひと突きし、怯むところを體のけた。さうして體が放れたところで、第二の突きを入れる氣だつたが、相手の中間が夢が夢中でワツと喚いて刺客の胸へ抱きついた。刺客は再び他に手の下しやうなく、邪魔を除くつもりで、中間の肩をひと突きたところ、中間はたわいなくへな／＼と

地に坐つた。その間に肩を刺された士は、片手で抜刀して刺客に立ち向かひ、刺客は駆けつけてくる數人の姿を見て、忽ち姿をくらましてしまつた。かういふ事情のもとに傷いた士と中間とは、奇妙な偶合で、疵のありどころもおなじ肩、深さも巾も殆どおなじ、強いていへば中間の方がいくらか輕症だつた。それではこの二人の年齢はいふと、士は四十歳を越えてゐたが、中間は三十歳にまだならない、平常の健康はいふと、士はさう丈夫だとはいへないが、中間は鬼とも組まんず頑健だつた。二人とも當時のオランダ流外科醫によつて治療されたが、出血の量からいへば、二人とも殆どおなじだつた、然るにである、士の方は恢復したが中間の方は四日目に死亡した。それではあべこべではないか、若く健康な中間が助かつて、中年の士の方が死亡しさうなものなのに、事實はその反對だ、それは何故か。

士には俺が死んだら討幕の擧はどうな

るか、死ねないから俺は死なぬぞといふ旺盛な精神が振起されてゐたのに反し、中間の方は俺はやられたから最う駄目だといふ氣力の沮喪がひどかつた。この話の士は精神作興の力が自分にあつたから、醫師が豫期したよりも恢復が速かつた。中間には精神作興力がなかつたから、若く健かなるに拘らず空しく死んだ。中間にもしそのとき、氣合をかける人があつて、中間もまた氣合を享けて起てるだけの男だつたらどうなつたか、恐らくは十中の八九まで、死になどしなかつたらう。

もう一ツ例を引いて置くといつて、その人が語つたのは、熊山に於ける兒島高德とその父兒島備後守範長のことだつた。

熊山に籠つたる兒島範長・高德父子は、

七ツの坂道から攻め寄する朝敵どもを、かしこに防ぎここに討ち、本堂の庭には高德

をはじめわづか十四五騎、そこへ石戸彦三

郎といふ朝敵の末輩が、この山の勝手を知

り、二百騎を率ゐて強襲してきた。深山の

木隠れ月くらく、火花をちらし闘ふうち、高德は馬からどうと落ちた、敵二人それと知つて、首振りかんと臨つけたところへ、高德の甥松崎彦四郎・和田四郎が駆けつけ敵を追ひはらひ、高德を本堂の縁にはこんだ。内胃の疵重く、馬より落ちたとき、馬に胸を踏まれて氣力が落ちてゐた。時に、父範長が枕のもとに近づいて、昔、鎌倉權五郎景政は左の眼を射抜かれ三日三夜までその矢を抜かず矢を射たといひ傳ふ、こればかりの小疵一ヶ所で、弱りて死ぬといふやある、それ程いひ甲斐なき心ならば、何ぞこの一大事を思ひ立ちたるぞ、聲高に罵り辱しめたところ、高德は忽ちに刎起きて、われを馬に昇きて乗せよ、今、ひと軍して、敵の奴原追ひ拂はんといつた。

範長はこれを聞いて大いに悦び、今は高德どもも死なじ、いざや敵を討ち拂はんと、主従十七騎で討つて出で、二百騎の敵を追ひ退けた。

かういふことがある。

兒島範長の罵り辱めたところのは、果して罵り辱めたのだらうか、それともさうではないのだらうか。子供が木から落ちて怪我したとき、親がうろたへて、この子は助からない死んだと泣くのと、この馬鹿野郎、自分で落ちて泣く奴があるかと、叱りつけて勵まし、醫者の手にゆだねるまでの間、生氣を強めさせるのと、どちらが良いか。良いかではない、どちらが眞の慈愛なのか。

ここまで話すと、技手が顔色を變へて叫んだ。さういへばあれほど荒々しいことをいつた將校が、重傷者を擔荷に乗せ、撥び、車に乗せるとき態度を、今にしてはッきり想ひ出した。かつて見たことのない丁重無比だった。こいつは可なかつた、私も醫者も間違つてゐた、早速、國へ歸つてみんなに話し、口には出さぬが腹のなかで幾人か思つてゐる間違ひを訂正させなくてはならない。かういつてゐたがその晩、飛ぶが如く、驛へ駈けつけて故郷へ歸つて行

つた。

◇

數日後、技手から或る人に手紙がきた。過日のお話を醫者その他にしたところ、さう云へばいろ／＼思ひ出されることがある。

その第一は醫者の奥さん娘さんがいふのに、あのとき將校さんが、あんなに荒々しいことをいつてゐるのに、眼のなかに涙が一ぱひ溜つてゐたのを見たのだが、涙だとは到底おもへず、しかしながら、眼の下に一滴雫するのを見るに至つて涙だとは思ひながら、叱るが如き言葉の荒さを、無情と思ひ誤つてゐたので、涙には非ずとおもひ、ために、忘れて今日になつたこと、返す返すもわが心知らざるが恥かしいと、かう云つた。すると、その涙なら俺も見た、僕も氣が付きはしたのだがと、そのとき居合せた幾人もがいひ出した。

さるにても私も醫者も、氣が付かない人種だつた、これからは氣の付く人種になら

ずんば、大日本に申請がないと氣が付いたから爾後は列車に乗り、バスに乗つても、ツイ氣が付かずに二人前の席を一人で塞ぎをるが如きことなきやうに、その日その日の食事の上にも、電燈についても、これに懸りて氣が付くことに心する。泣いてゐながら苛烈な態度を執る、大きな愛情には、今更ながら教はるところが深く高い。私共は竊に心に柱が建つた。

かう書いてあつた。

篤志寄附者芳名

本會活動資金の一部へと、左記の通り篤志寄附下されました。

金 一百圓

沖繩縣島尻郡東風平村

鳥添樂文殿

金 十圓

平壤府大和町華頂寺

中川大仙殿

とし子を授かる (二)

……「業」の妙味……

岡 本 一 平

佛教では人間に固定の「我」といふものを認めない。在るものは「業」の流ればかりである。しかしこの「業」といふもの頗るむづかしいもので、現代の言葉を當嵌めて、「いのち」といつたり「生命」といつたりしても、なか／＼その本質全貌を現しきれない。そして、むかしから「業」の性源はこれを認識できるといふ説と、認識できないといふ説がある。關聯して、現實で成佛ができるできないなどいふ議論を生じ、一佛教中、幾つかの宗派、宗派の岐れもこれに原因するものがある。さうはいふものゝ佛教を實踐するものにとつては、それはそれとして實際に修業の不

便を感じない。つまり「業」の性質は、因果歴然であるからである。闘むものは昇り、意するものは墜ちる。この道理を無視する佛教は無いからである。

面白の業報や、さらば努め續ぐるものは、太まり開き、養はざるには瘦せ細る。

一わかつて多となる「業」もあれば、遇ひ合ひて一ともなる「業」もあらふ。もとより固定の「我」なく水や瀬や流れにも似たる姿で「業」があるといふから――

その業報、忽諸にして現るゝこともある。三世を過ぎて次第に報ひらるゝこともある。的確には、佛眼のみ觀得る。しかし隠現しつ

つもそろばん勘定は確なのが因果の道理だといふから――日々の勤め、生死の際、いづれにかけても頼みがある。

「愛」とて、この「業」性の上で行はるゝ作用である。かの歴史上に見受けて夫婦の龜鑑と仰がるゝもの、妻が己れに死して良人を護る上に生きんとした例、死せる良人に代つて妻が遺業を成就した例、一應は愛と意志の働きに考へ取つても、充分、感激に償するが深くは「業」の因縁にまで廻り下げてみて、一層の眞實に鑒たれる。まことや眞愛は沒我である。「業」の性本の無我性に近しいともし、生前すでに愛の因により似たり密つたりのところまで合夥し來れる兩者の「業」が、一方の死を契機として、俄然一筋に流脉し始むこと想像に難からず。良人の没後、その遺子を抱へてとみに男勝りの性格を帯び來る未亡人の如きも、これ必ずしも周圍環境の激變とのみは見得べからず。また、自立決意の迷りとのみも見得べからず、寡婦の女丈夫がそ

の遺子育成に當つて答する父性の數の如きんば、婦人身中、なほ生ける亡夫の「業」の兼併を感じて、涙なきを得ぬものがある。いかに意地強くとも女は女だ。わが子に對し、あれだけの策勵はなし難い。

信仰と靈驗の關係の如きも、この「業」の



いづ
ちやん
禮拝好き
合掌



わこちやん
やりギリ又

胡瓜の漬
も持たし
とくといつ
かぎやくに
してる

流離性によつてするぶん解離し得られるやうにおもふ。もつともこれは人間を超人間の間の「業」の問題であるが。

詩人にして大乘の義を學んだかの子文史は、生前にすら業報上に於ける幾多の變轉を詩人の感覺に感じたやうだ。後前に近くなつてから、かの女はかの女の實妹によくこんなことをいつたさうである。自分はもはや、多

る」と。いひ方が飛躍的なので奇怪にもとれるが、實は何でもない話なのだ。

かの女は良人の岡本なるものと、同じ藝術を職とし、そのことにかけてもまた藝術家の生活にかけても、苛酷極まる経験を重れた。

悶死と蘇生の思ひを做したであらう。それは自分の性格中に在る舊豪家育ちの箱入娘の甘い分子を磨り減らし、岡本家にて鑄込まれた新性格の要素を増加へた。もとよりかの女には自分でさへ愛重する無垢純情の素質がある。これは天地の本然に近いもので増減も盛衰も無い。またかの女には信仰がある。すべて合せて「業」である。そしてこの「業」の

摩川の實家から生れ出た女ではな

い。岡本とわ

たしの晩年に近くなればなるほど、藝術家風に一種

の自覺を生じたのであつた。實に今見る新性格の自分は嘗ての自分とはほとんど生れ更つてゐる。そしてこれは舊豪の自分を母とも見

で、相披勵するに肝石の役にもなつて呉れ

た良人を父とも見做し、生れ來つたものである。以上を詩人だけに詞章を切詰めて言つたまでである。

事實、私にしてもかの女の晩年は、男女の性別を離れて「業」上の骨肉縁の感が深かつた。

かゝる相手を失つた私が、偏身を挽がれたぐらゐのことではなく、何物をもわが身をよも根ころげ持つて行かれた思ひに呆然自失してしまつたことは察するに難くはあるまい。これを僅に踏み止まらしたのは、かの女が信奉する現實を蔑にしない、死をも克服して生き堪へ行く、大乘、久遠の生命の實踐である。私は盡きた力の奥から勵まされるものがあつて、から、おひ／＼に、よろほひ立上り直して來たのだが、今おもへば、そのとき私は生きながらに私に死し、かの女は死にゆく／＼生き盛り、私の形に於て現實にお役に立たん志氣に燃えつゝある感じが深い。とにかく「業」一筋の感が深い。

勵けば勵くほど「業」一筋の感が深い。そして現實に役立つ意識そのものが「業」の撥轉向を自知するものから、女史を業一筋から故人へと別ち離し、冥福を祈るべくは現實に役立つ意識の自知その事がおのづから、供養ともなりつゝあると考へてゐる。私は住む町の家庭防空指導係の係長といふ役を受け、警防團員ともなつた。

しかし、傳統に従ひ、良俗を守るべく、私は女史を祭らないことはない。

私の家では、女史が生前起臥した一室を佛間としてある。先祖の牌、両親の牌、しかし私の家の佛間では、女史の牌に相當主要な位置が與へられてゐる。なぜならば、私の家にとつて女史は家中の女傑にも當る人なのであるから、——私は女史を名指すに、生前の女名をもつてしない。菩薩位の名前で呼んでゐる——これをもし不遜とするなら、故人ならば誰しも佛さまと喚びならふその程度のものとも解して貰ひ度ひ——只今の若き妻

も、せんと私に習つて、菩薩位の名で呼んでゐる。口を利き出した上の女の子もこれに倣つてゐる。朝な／＼の供膳、初ものゝ進供これ等は妻が來てからみな妻が監督でやつてゐる。私自身でするのは、家で新著ができたとき、これを牌前に備へることだけぐらゐのものである。もつとも、到來物や、家へ何か食物を作つたとき、ふと私は氣が付いてこれを牌前に上げたらばと思ふことがある。そのときは妻に命じて上げさせる。私は再婚以來、憧憬とか追慕の氣持で、自分一人ひそやかに女史の佛間に入つたことなぞない。再婚の際の結婚の式儀、ふたりのこどもが出來たとき、その報告と命名式、みなこの佛間で露堂々へ行つた。

何故であるか。一つは後に來た妻に、良人の心情に對して少しも疑點を起さしめぬ用意である。なる程、前妻は、生前は女であり良人の妻であつたことに間違ひはない。しかし死を境に以來は、祖々の靈同様、家を護り家

族を育まる、「光」の一つとなられた。女に嫉妬といふこともあり、同性に對する競争心といふものもある。後妻いかに猛くとも、かく祭る光に對して、戦を挑む餘地も無からふ。しかし、この心配は實は杞憂であつて私の貰つた後添ひは内端で素直でたゞお叩頭ばかりしてゐるやうな娘であつた。そして自ら生める上の女の子が、この佛間の前を通るとき、手を合せて拜む形をするといつては悦び、女史の牌前にあどけなく供物を運ぶといつては悦ぶ女である。私は既に妻として迎へた以上、主婦の全權、家庭の主座は、残りなく與ふべきものと思つてゐる。しかし彼女はその座をすさつて端居し一々小面倒など私の指令を仰ぐ。囁き付くやうにしてこどもを育てその育て方に就てだけは自信を主張して、一歩も曲げない。平凡に徹し、母性の本能に徹する點にかけて女史も驚異の眼を見張り、微笑するであらうやうな女だ。いつでも木地で飾り氣ないことは氣質のみならず、例へばお

白粉のやうなものは年に一錠買つて有り剩つてゐるやうだ。

私の再生の家庭は、長男は出征してゐるから、このこども二人を中心に、若き主婦が面倒をみて、睦しく賑かである。

もし遠慮なくいはして貰へば、今のところ私は後妻を貰ひ當てたといひ度い。これは私がいつも最後の斷を下す場合に、熟慮を重ねた末の處置方はひと先づ傍にさし置き、別に無心になつて、祈るころで動かす直感の做さしめたわざで、私の選擇の力などいひ得るものではない。この婚儀は實に形では偶然的のやうに見へた、しかし、底に流るゝものは、やはり「業」一筋の働きかけた必然のものゝやうに思へる。私が女史の牌前にて、婚儀を擧げたのは、女史の意を酌んでも、かくはのつ引きならすすべきことであり、かくしてのみ女史に嘉さるべく思つたからである。二人のこどもの命令式も、老齡に近くとし子の出生は、私にとつては奇蹟の想ひにて、前

回に述べた如く、いふを許さるべくば、わが民族生々の方がわれ等如き微細のものにも觸れたと感ずるのであるが、別にひそかに女史の遺志の繼承とも考へぬことはない。なぜなら女史は役年の二三年前よりしきりにこどもを生み度いといつてゐた。しかも五十近い女としてはこれは能はぬことであつた。

前回述べた、ある雑誌記者の家庭のしつくりゆかぬことに對し、自分の家の成績を擧げて、論ずるのは手前味噌の觀はあるが、正直にいつて彼は再婚の際の用心意と、後妻の抜ひに就て、思ひ切つた踏切りが足りなかつたやうだ。それは涙と、懸崖から手を撒するほどの勇猛な決斷を要する。しかしこれをしての後、良人はおひ／＼大に生き小に死し、生者冥者共に、成道の途上に在る同行として導き得る。再婚前に私情によつてなし得べけんや。念々に祈る心と、現實に對する責任感これが再婚に船出するものゝ方向舵であらう。(つゞく)

紙手るず報を死の生學

……る倒に教邪と愛溺の親……

系 正 田 和 士 博 學 醫

稗夫君。

お手紙たしかに拜見した。早速御返事を出すべきだったが、實は書く暇も無かつたのだ。暇が無いといふより、書く落ちつきが得られなかつたと云つた方がいゝかも知れない。

稗夫君。

弘君はとうとう亡くなつて了つた。

君に容態を知らせる管の手紙が、遂にこの悲しい通知になつて了つたのだ。弘君は五日の曉方三時卅分、君も知つてゐるあの二階の六疊で最後の息を引取つた。廿一年の短い生涯の幕を永久に閉ぢて了つたのだ。

御両親も、弟さんも、妹さんも皆そばに居られた。臨終は別に苦しみ様子も無く、極めて静かに、眠る如くであつたといふから、これだけはせめてもの慰めである。

稗夫君。

弘君は君の一番親しい友人だつたのだから、この手紙を見て、君はどんなに落膽するだらうと心配する。然し、先達、君が夜行から夜行への慌しい旅で、遂々お見舞に來て

呉れた、あの時の容態で大凡はその後の成行を豫想し大體今日あることを覺悟して居られたであらう。

然し、私は私で、醫者といふ立場から實に残念とも何とも云ひやうの無い口惜しさ、いや寧ろ、いきどほろしき心地で一抔なのだ。

弘君がもう少し自覺してゐて呉れたら——お母さんが、もう少しあの病氣といふものを理解されてゐたなら——よもやこんな事にはならなかつたらうと残念でたまらぬのである。たとへ最悪な経過を取るにしたところが決してこんなに迅速く悲慘な結果とは斷じてならなかつた筈だ。醫者としての私にも無論責任はある。自分の微力なるを悲しむ。然し今度の事たるや餘りにも愚かである。充分助かる筈だつたのに、私の言ふことさへ聽いて呉れたら——餘りのことに唯私は無暗に腹が立つて來るのである。

忘れもしない。

弘君が肺炎加答見といふ病名の下に東京から歸つて來たのは去年の春も末に近い頃だつ

た。私が弘君を診察したのはその時が初めてあつた。左の肺尖が明かに腫れてゐる。レントゲン検査も血洗も皆良くないが、何より面白くないのは栄養の悪いことと一見して分るその顔つきであつた。熱も相當あつた。結核の症状は全部揃つて居るのだ。然し弘君は案外平氣でよく語り元氣も割合よかつた。東京の醫者からも充分注意され、又私もくどい程戒めたので毎日安静を守り療養生活に餘念が無かつた。

二月ばかりすると熱もおちついて來たし、咳や痰汗も出なくなり、いくらか肥つて來たやうに見へた。元氣も大分恢復して來た。斯うして本人は勿論、御両親や私も先づ安堵の胸を撫でおろして夏を無事越すことが出來たのだつた。

ところが之からがいけなかつた。發病の初め、病氣の苦しい時には、一年でも二年でも休學して充分治療するつもりだつた弘君は、案外速く快方に向つて見ると、もう結核といふものを見くびつて、直ぐにも學校へ歸りた

いと願ふやうになつた。私が行くと、もう何日位で東京へ行けるかと、そればかり聞くやうになつた。私はこの處非常に經過が良いが然しあの東京で元氣のいゝ友人達と、スポーツを競ひ、成績を争ふやうな生活をするには未だ未だ時期の遠いことをよく話した。事實肺尖の濁音はまだ明らかにあるし、ラッセルだつて聞える。今上京するのは爆彈を抱いて火事の中へ飛び込むやうなものだと何度も何度も云ひきかせた。然し弘君には學校の誘惑の方が強かつた。私は敢へて學校の誘惑と云ひたい。實際勉強はよく出來たし、友達に一年後れるといふことが、どうにも堪へられない氣がしたのであらう。苦しくてたまらぬ時は、じつと醫者の言ふ事も聽いてゐたが、自覺的に苦痛が無くなつて見ると、もう安靜などといふ消極的な事は聞いてゐられなくなつたのだ。夏の間は、東京から見舞に來たといふ友人をすら私は斷つた位であるのに、秋になると、容態がいゝので家人もつい許してゐたのである。ろくに病氣の性質も知らない友

人達はおい何をいつ迄ぐづぐづしてゐるんだいと、激應する。弘君には東京の學生生活、友人との交際が愉快で愉快でたまらなかつたらしい。これは非常に結構なことなのだが――

それにこの際いけなかつたのはお母さんだつた。お母さんは、これ程良くなつて、これ程勉強がしたいと云つて居るのを、無理に止めるなんて――と、そこは素人のことであるし、弘さんが可愛い餘り、いつしか私の忠告を軽くする譯ではあるまいが、息子の希望を許したいやうな氣になつて了つたらしいのである。

十月初めの朝、弘君は無断で東京へ飛び出して了つた。家の人がまだ起きない内に置手紙を残して一番の汽車に乗つて行つたといふ。翌日お母さんが來てこの事を告げられた。置手紙には勉強の爲斃れるなら本望ですから絶対に構はんでおいて貰ひたいと書いてあつたさうである。お母さんはあれ程迄に堅い決心ですから私も大丈夫だと思ふと、云はれた。

私は暗然とした。もう何を云ふ元氣もなかつた。あれ程口を酸くして幾十度となく話してゐるのに——今更云つたとてこの人達には分らないのだ。

私は來るべき事實を想像して慄然とした。利夫君。

以上の如き事情を君はよく知らないと思ふが、どう考へるか。弘君だつて教育はあるしお母さんだつて理解のある良い人であるのに結局私の誠意が足りなかつたと君は責めるだらうか。

それから二ヶ月近く経過した。多らしい日ざしの午後突然弘君のお母さんが來訪した。お母さんは涙を流して「先生のおつしやる通りになりまして、何とも申譯ありません……」とその後の事情を語られた。聞けば、弘君から數日前電報が來た。お母さんが倦て上京して見ると下宿の二階に四十度の高熱を發して唸つてゐる。風を引いたとのことだつたが主治醫を訪ねると肺が悪いから少し熱が下つたところで國へ歸つて、ゆつくり養生した方

が宜からうとのこと、一週間程待つて少し熱が下り氣味のところで思ひ切つて連れ歸つたといふのである。お母さんはすつかり恐縮して何度も何度も頭をさげて頼まれた。私は豫想がいよいよ事實として目前に現はれた恐怖を感じた。今度こそ危いと思つた。

弘君は見る影もなくやつれ果てゐた。熱は卅九度前後、咳がしきりなしに出る。蒼白い死人の様な顔は最早診察しなくとも重態のことを語つて居た。左側の病變はずつと擴つて、その上右側の肺尖にもラッセルが聞へた。東京で無理押しをして居たところへ風を引いて一度にどつと進行して來たのである。弘君は涙を流して喜んだ。而して今度こそは先生のおつしやる事を絶対に守るからお願ひすると云ふのであつた。私は可哀そうになつてそれから毎日毎日往診した。君。醫者が毎日一度は往診せねばならぬ患者を持つて居るといふことは中々の苦痛だ。肉體的には大した事はないが精神的に可なり重荷だ。少くも私にはそうなのだ。

弘君は段々持ち直した。絶対安静を守つてゐる中に熱も少しづつ下つて來たし、急性症狀が薄らいで一般狀態が十分良い方に向つて來た。この邊のところは餘り長くなるから止めるが、とに角會話すら絶対禁止であつたものが少しは許し得る迄になつた。私は何れにしても非常な危機に直面して居る弘君にいろいろの細い注意と心構へと就て語るのを常とした。

弘君は非常に幸福だつた。何故ならこの再度の重病も段々と恢復して行くやうに見へたから。而して又非常に不幸でもあつた。何故なら肺そのものの變化は外觀ほど恢復せず然もそれは診察して初めて分るので、素人には想像が出来ないのであつたから。

そこにまたもや悪魔が待伏せしてゐたのである。

このやうな肺患ではたとへ幸福な運命であつたとしても、二年三年、或はそれ以上の療養生を必要とする。それは弘君もお母さんも分つてゐる筈であつた。然し一日も速く治

りたいのは人情である。この焦燥につけ込んだのが悪魔だつた。迷ひだつた。

ある日お母さんが來られて、もう大分良いから之からは私の手で、私の信心で治したい、その方の良い先生に懇意な人があるからとのことだつた。私は茲で迷はれては大變だと思つたので、何を信仰するのかわ聞いてみたが、お母さんはどうも言葉が濁してはつきりした事を云はれなかつた。餘程堅い決心であるらしいので又しても私は黙つて了つた。

利夫君。

私は決して信心や信仰に反對しない。否、大いにその必要を力説してゐることは君も知つてゐる筈だ。けれどもこのお母さんの信心はどうも不安でならなかつたが、私は寂しい心を抱いて唯成行を見つめる他には仕方なかつたのだ。私はもう弘君は駄目だと豫感した。のみならず弘君の一家も私の手では救ふことが出来ないとい絶望した。所詮絶體絶命の處まで行き詰らなければ眞實のことは分つて貰へないのだ。

とうとう最後に來て了つた。

先月の廿八日に大略血が起つた。——弘君は不思議にこれ迄唯の一度も略血したことはなかつたのだが——突然電話で呼ばれた。飛んで行つて見ると枕から布団から一面の血だ。鼻、口、頬、頸、胸のあたりまで生ま生ましい鮮血にまみれ、顔は土色、もう眼も見へないらしい。耳も聞へない。辛うじて呼吸してゐるばかりである。

止血劑も強心劑も打てるだけやつた。酸素吸入も勿論だ。然し一切は既に過ぎ去つてゐた。一晝夜の昏睡の後、廿一年の生涯は遂に最後の幕をおろして了つた。あれ程熱望してゐた大學の本科へあと半年といふ所で永遠に前途を打切つて了つたのである。

あとでお母さんは「今度といふ今度本當に眼が覺めました」と泣きながら述懐された。私の手から離れた二ヶ月近くの間、一心に拜んで呉れたといふのは〇〇教の先生だつた。お母さんは「よその子はどうでも、弘だけは助けて頂けると思つてゐました」と泣いた。

私は〇〇教そのものを悪いとも思はないが、これ等の人々の信仰が少くも誤つてゐることは斷言して憚らない。それに一層惡かつたことは、この先生が〇〇術といふ療術師を兼ねてゐることだつた。だんだん話を聴いてみると、この重態の病人を一里もある自宅へ通はせて、腹を揉んだり手足を運動させたりしたさうである。弘君もお母さんも今度こそは丈夫になると信じてゐた。絶對安靜に近い患者を一里も満員のバスで通はせて——この〇〇教の教師といふ人間を私は撲つても撲つても足りない氣がした。

利夫君。

私は弘君の今度のことに就いては書いても書いても足りないのだが、——科學と宗教、病氣と信仰、正信と迷信、療術師の問題等等——それに弘君自身が書いた「勉強の爲めなら死んでも本望です」といふ、一見信つたやうな景氣のいい言葉に對しても、私は鋭い冷徹な批判をさへ加へたく思ふ。然し弘君はもう死んだのだ。(以下次の頁へ)

筆隨教宗


 物語
ノ坊臺

とんちん 糸山天眞文

貯金箱解放事件以來、坂下の毘門様の縁日に五錢づゝお小遣ひを貰ふ不文律が出来上つた事は有難かつたのですが、今迄何も満足に訓え様としなかつた老師が、どう思つたか夫以來急に徹底的にお經を仕込み始めました。しかも鋭烈に、嚴格に。

朝は眞暗な内に呟き起されて、本堂の戸を開けてお靈障を上げる。そして少し離れた隣の寺の梵鐘の鳴らぬ前に、速やかにゴーンと梵鐘を撞くのが豚珍の勤めでした。

以前には起きよと云ひ兼ねてか咳拂ひで、清慮勝ちな起床の催促でしたが、今度は宗旨を變えたのでせうか、大つびらで起すのです。

『豚珍や、起きなよ、學校が始まるよ』
『未だ學校の門は閉まつてゐます。餘り早く』

行くと學校の小便さんに叱られます』

『アレツ!!』……

『學校の先生が迎えに來たよ、え』

『生徒を一々迎えに來る程先生は暇ぢやありません。嘘をつくとお圖廣様に舌を抜かれま

す、グー／＼』

『生意氣云ふな!! 何事も月月火水木金金だ、起きなよ／＼』

『いくら、そゝかしいからと云つて、肝腎の土曜と日曜が抜けてゐます、グーグー』

『あれだ!! 之で今の子は理窟ほくつて學校に上げるのも善し悪しだ』等と愚痴をこぼしたり、こぼされた。

とまれ、斯ふして諧謔的な和やかな會話の中に、早朝から嚴肅に晨朝の勤行が、たゆまず毎日々々當まれ繰返されてゆくのです。

が然し、虫のおさまらぬは隣寺の和尚さんです。梵鐘撞きに豚珍の寺に先を越されたいまいましさに、いつもの自分の寺の梵鐘を撞く時間を繰上げて、之聞えよがしにゴーン、

佛さまになつて、私の言ひたいことなぞもうよく知つてゐて呉れるであらう。

利夫君、

私の云ひたいことは盡きないが今日はもう之で終らうと思ふ。何れ又會つて詳しく話す機会もあらう。君も餘り頑健ではないから健康だけは注意して呉れたまへ。筆が足らないが、以上私の書いたことをよくよく考へて欲しい。

(筆者は千葉縣安房郡富浦町多々良富浦海濱學校長)

陸海軍病院「慰問淨土」

寄附者芳名 (敬稱略)

○二十五圓 名古屋市東區筒井町 淨土敎校

○十圓 東京都牛込區櫻町三七 桑原茂

○五圓 同大森區池上德持町五四ノ一 大林秀

一 ○五圓 同牛込區袋町十三 鶴田美智

○五圓 同深川區永代一ノ一八正源寺報恩會

員 吉濱あき

○四圓五十錢 大阪市東住吉

すると豚珍の老師之に負けて愚僧の面目が立つものかと勝負を擧げんばかりに真夜中にゴーン／＼。

何事が起きたかと附近の人達戦々兢々目を丸くするばかりです。

事情が次第に判明するに及んで空いた口が塞らず、安眠妨害で大擧してお寺に苦情を申込まれる騒ぎ。

「愚僧は控目にし勝ちなれど貴僧が餘り早起き致さるゝので!!」

「拙僧は隱忍自重しつゝありたれど、貴僧が挑発奇襲驚鐘せらるゝに及んでは止むに止まれず……」

と昔氣質一徹な兩老僧の變

ないさかひ、其の擧句の果がお上のお裁き、其の處置宜敷を得て暫らくの間休戦、相方協議、時季、時刻を統制協定の上、やつと合掌同入和合海と圓滿裡に解決したと云ふ、いと



も珍らしき奇談を生んだ様な始末です。自然とそんな雰圍氣に採まれ育つた彼は少しは馴れ始めたのでせうか、梵鐘撞き決戦に備えて、準備おさ／＼、怠りなく、せつせと掃除や勉強は日中まとめてすませ夜はさつさと憩みま

す。と云ふわけでは早朝訓練は全く苦になりません。亦お經の方も今では本を離れても、どうにか薄覺え乍ら老師のあとを續けられるのです。

が然し豚珍にとつて不思議な事には、斯ふして朝早くから睡眼をこすつて、誰に御禮を云はれると云ふのでも無いのに、しびれを切らしてのお勤めが何處がいゝのかしらと思はざるを得ないの

- 區湯里町四四二ノ一 菅原七郎 ○四圓 東京品川區東品川二ノ一二〇 長谷川松太郎 ○三圓五十錢 臺中州北斗郡溪州庄 青柳ユサ ○三圓 大阪市大淀區南濱町二ノ四二提法寺 橋本順孝 ○三圓 東京都牛込區袋町二五 松山光代 ○三圓 桑名市矢田町一鈴木すづ子 ○三圓 伊丹市伊丹四一六 村岡志津 ○二圓 弘前師範司令部參謀部 畠山吉助 ○二圓 大阪市東區南久寶寺町東洋ソロバス會社内 高橋順子 ○一圓五十錢 秋田縣北秋田郡落合村 根本富貴 ○一圓五十錢 西宮市郷免町 阿彌陀寺 ○一圓五十錢 北海道松前郡吉岡村 海福寺 ○一圓五十錢 東京都杉並區阿佐谷一ノ七七三 川邊かよ ○一圓五十錢 明石市外玉津村下津橋小川龍碩 ○一圓五十錢 愛媛縣新居郡大島村 顯行寺 ○二圓五十錢 奈良縣國樺村南大野 三浦賢成 ○一圓五十錢 大阪府堺市百舌鳥町高田 岩下晴七 ○一圓五十錢 大牟田市曙町淨心院 井村正喜 ○一圓 愛知縣海部郡大治村長牧 圓光寺

です。

最後の磬を鳴らし終つて、やれ／＼と法燈を消して之で済んだとお佛壇の障子を閉めてほつとして庫裡の方へ戻らふとすると、老師はこれに驚りもせず、改めて東に向つて暫らくの間違かに合掌默禱を捧げるのです。

どうしてあんなに拜む事が好きなのかしらと不思議相に所化に聞くと、

『家の老師かね!! あれは先天的に好きなのさ、御本尊は阿彌陀如来一佛だから、夫丈けでよかり相なものだが、夫がその多情佛心と云ふ奴でね、數多く拜まんきや何となく物足りんと云ふわけだらふ』と老師の前では小さくなつてゐる癖に老師を老師と思はぬ様な人も無げな知つたかぶりの口振りでず。

人懐こい體面の無い豚珍、勤行が終つて御苦勞だつたね、と云つて優しく頭を撫でゝ呉れる御機嫌の良し或日の老師を捉まへて『老師!! どうして方々拜まなきやならないの?』と老師を見上げながら他念なく問ひ訊すのです。

『豪い處へ氣が付いたな、お前にもおかしいと思ふかね、ワシはね、斯ふして有難い御法を毎日々々味はして頂けるのは、天皇様の御恩、學校で先生から、天皇様の御恩の有難さを訓えて戴いた事が有るだらふ、それだ、お釋迦様も四恩の内に眞先に國王の恩の有難さを説いておられる。若し我國が内輪同志がいづもゴタ／＼して治まつてゐなかつたら、斯ふして法悦を味はして戴ける處では無い、それで毎日々々、天皇様を拜まして戴いてゐるんだよ。

人間はな、みづからの道を深く信じて露ほどの疑ひも無く、みづからの道を楽しんで、云ふ如く行ひ、行ふ如く言ふて少しの暗い影も無い落付いた悠々たる生活、それが大切だよ、旨い事は云つても所詮身に行えない人間は生きてゐても人間の抜け殻と同然だよ、分つたがな』と敬虔な念を以てしんみりと語られるのです。

豚珍も老師の言葉を聞き乍ら、意味はよく聞き分けられなくとも何となく身がしまる様

な、そして日本に生れた有難さをしみじみ感じさせられるのです。

之を聞いた寺内の所化達は口先や、文句で天皇陛下の御徳は饗家や信徒に向つてたえこそすれ、老師の様に心から素直に、文字や議論を超えて、陛下の御恩を感謝する様な氣持をほんとうに持つて居らなかつた今迄の自分達を今更乍ら恥しく思ふばかりです。

(其の三)

筆者の添え書き 〃お前の一番好きな人、誰と問はれましたなら、よどみなく即座に老師と答へるであらふ程に豚兒を愛育して呉れられた無名の凡僧故老師の言行を、たど／＼し筆に寫して懐しい少年時代の思ひ出に生きる事は、豚兒にとつて楽しい生甲斐のある一瞬であります。

梵鐘撞き争ひは決して虚構の事では有りません。明治末期に於ける事實奇談、御好意ある多くの御投書に應えて一筆書き添えて御禮の御挨拶に代えます。



赤道を過ぎて

海軍報道班員

湊 邦 三

ボルネオ島

『ボルネオが見えた、ボルネオが……』

午後〇時頃、甲板からさういふ聲が聞えてきたので、私は船室を飛びだして、鐵梯子を登つて行つた。

類人猿が棲んでゐる、世界第三位の大島で、豊富な油田地帯を持つてゐるボルネオ島には、誰しもが物珍らしさと期待とを抱いてゐるのだ。

『あれが、ボルネオです。』

甲板へ出て行くと、二等運輸士のKさんがゐて、指さしてくれた。

そこには、椰子林が疎に生えた洲濱のやう

な扁平な陸地が見えてゐた。

『あれですか。』

『さうです。』

『へえ、あれが、ボルネオ島で……』

瞬間、私は眼を疑ひ、Kさんの言葉を信じかねた。

それは地圖の上で、ボルネオ島を勝手に想像してゐたからだ。

船が近づくと、世界第三位、日本の本州を三倍にしたほどの、未開原始の密林で蔽はれたボルネオ島が堂々たる姿を現はすものとき

めてゐてそれが裏切られてしまつたからだ。

盲人が象を撫でて、牙に觸れた物は槍のやうだといひ、鼻を撫でた者は蛇のやうだとい

い、腹を撫でた者は、壁のやうだといつた、

あれの反對に、巨大なボルネオを象にたとへ

るなら、一本の毛の太さにもあたらない、椰子

子の生えてゐる洲濱を見て、私はボルネオ

ではないやうな氣がしたのだ。

『午後〇時頃、バリツクババンへ入ります。』

二等運輸士のKさんはそういつて、船橋の方へ歩いて行つた。

私は椰子の生えた洲濱をほんやり見てゐる

内に、海の色が薄い灰綠色に變つてきたのに

氣が附いた。

上流から土砂をはこんで、海の色を褐色に

する揚子江のやうな大河が、何處か、近くに

あるかもしれないと思ふ。

扁平な陸地の洲濱が遠ざかり眼界から消え

てしまふと、見えてゐるのは灰綠色の海ばかり、

いささか期待はづれの私は、船室へ歸つてベツトへ入る。

南方生活に必要な午睡の癖をつけるための

訓練である。

船影を見る

パリツクパベンへ船が入る時刻なので、甲板へ出て行くと、右舷に群つてゐる人たちの間から、懐りの聲が聞えてきた。

『艇にさわるなあ！』

『片ッ端から、壊してやあがる！』

『つぶれた風船みたいぢやないか！』
急ぎ足で、右舷へ行くと、船からどの位の距離であらうか。灰緑色の海の向うに陸地が見えてゐて、小高い山が蜿蜒とつづいてゐる、その頂に、中腹に、白や茶色のタンクの群がならんでゐた。

懐りの聲をあげてゐる人々は、双眼鏡を眼にあててゐるから、破壊されてゐるタンクの状態が手に取るやうに見えてゐるのであらうが、私の肉眼ではハッキリしなかつた。

船の進行につれて、パノラマのやうに移動して行く陸地の、緑の山裾に白壁や青壁の家が點々と見えてきたが、白い砂濱、緑の繁りの間に見え隠れしてゐる家々など、全體

の風景は、熱帯樹の椰子を取り去つたら、日本内地の海岸と格別の變りがない。

(これが、ボルネオか……)

私が甲板の欄干によりかかつて、はるばるとした氣持になりながら眺めてゐる内に、眼の前へ、第〇〇號〇〇艇が小柄な姿を現はしてきた。

ヒリッピン群島ミンダナオ島のダバオ灣から、われ／＼の乗船〇〇丸を護衛して、晝間は〇〇米、夜間は〇〇米の前方を敵潜水艦を警戒してきてくれた〇〇艇に、私は心の内で禮をいつた。

(御苦労さんでした！)

その頃、タンクのある小山は盡きて、その向うに、廣い河口が見えてきた。

その河口へ、〇〇艇が鉤先を向けて、〇〇丸も白い渦を巻いて針路を變へはじめたのは、いよくパリツクパベンへ入つて行くのだ。

海の色は、緑を淡くして灰色が強くなり、河口の向うに、椰子の密林に蔽はれた陸地が

涯しくひろがつてきた。

それは〇〇丸が針路を變へた頃から、河口の奥に船影が群つて見えてきて、甲板の上が騒がしくなつてきた。

『ゐる／＼！』

『大きな船があるぞ！』

『軍艦だ、日本の軍艦がある！』

はる／＼と海を乗り切つて、日本の船に逢へた時の心強さは、経験して見ないと判らないかもしれない。

船影を眺めて、私も子供のやうに顔を凝らしたのであつたが、日本の軍艦があるといふ聲を聞くと、思はず吹きだした。

敵の軍艦があるところへ、〇〇艇が誘導して行く筈がないからである。

遙かに見えてゐた船影が、次第に近づいて鮮明になつてきた。

〇〇艇がある。〇〇艇がある。〇〇船もある。巨大な〇〇船もある。その横腹へ、母親の乳房へ縋つてゐる子供のやうに、小さな船

が横づけになつてゐて、〇〇をもらつてゐる

姿が可憐である。

前部後部に起重機のある船は、〇〇船で、船と船との間や、船と陸地の間を、真紅の海軍旗をひるがへした内火艇が雪のやうな波を立て、矢のやうに走つてゐるのが見える。

われ／＼の乗船〇〇丸は、軍艦〇〇に近く投錨した。

その時、私は空が曇つてゐるのに氣がついて、それが不思議に思はれた。

臺灣澎湖島の馬公を出てから〇〇日間、スコール雲は見たが、空一面を雲が蔽ふてゐるやうな曇天は、全然忘れてしまつてゐたのだ。

敗残の姿

翌朝、セレベス行きの報道班員は、〇〇丸の舷梯を下りて行つた。

私は雑誌帳一冊と鉛筆二、三本、水筒を肩にしただけの輕装である。

全員乗りこむと、定期船は舷梯を放れて、陸地に向つた。

今朝も曇天で、海は灰色、縮絨縞のやうな

小波がある。

軍艦〇〇の横を通つて、棧橋が近づくとき、バリックバパンの市街が見えてきた。

見えてきたといつても、製油工場のある一部の市街で、支那華僑の商店街やオランダ人の住宅街などは、前面に見えてゐる小高い山の裾を北へ廻つて行つたところにあるのださうである。

『やつぱり油の市街だなあ！』

小高い山や海岸が接近してくると、報道班員の誰かが嘆息するやうにいつた。

私は無言で凝視してゐたが、小高い山の頂といはず、中腹といはず、タンクの群がならんでをり、海岸にはドラム罐が山のやうに積まれてをり、壊破されて鐵骨が餘のやうに曲つてゐる工場の、慘憺たる殘骸などを見てゐると、ブン／＼油が匂つてくるやうな氣持がした。定期船が棧橋へ着くと、私たちは眼を腫つた。

渚一面が、ドス黒い油で光つてをり、打ち寄せてゐる波も、ドス黒い油なのだ。

そして磯には、餘のやうに曲り歪んだ鐵骨が散亂してをり、無數のドラム罐が山のやうに積み上げられたまゝ、悉く焼かれてゐるのだ。

『ほう、ひつくり返した玩具箱見たいだ！』
棧橋へ上つて歩いて行きながら、私は足を止めてそうつた。

散亂してゐる鐵屑に濕つて、焼けた自動車、波打ち際に、おびただしく轉がつてゐたのだ。

横倒しのもの、腹を空へ向けたもの、重なり合つたもの、子供が遊びに飽きて轉覆した玩具箱をつくりであつたが、どの自動車でも、腰の低い瀟洒な恰好の、戦前はオランダ人が愛妻を乗せて、颯爽と乗り廻してゐたであらうと思はれるものばかりであつた。

その光景を眺めてゐると、本國の六十倍もある東印度諸島を武力と狡智とで奪ひ、そこから統れるだけ統つて、飽くなき物質欲を満たしてきたオランダの敗残の姿を如實に見てゐるやうであつた。



心行相助け進む

……法然上人法語解説(二十一)……

中村 辨 康

法 語

名號をきくといふとも、信ぜずば聞かざるが如し。たとひ信ずといふとも、唱へずば信ぜざるが如し。たゞ常に念佛すべきなり。

(勸修傳第二十二)

一念十念に往生すと言へばとて、念佛を疎想に申すは信が行をさまたぐるなり。念々不捨者といへばとて、一念を不定に思ふは行が信をさまたぐるなり。信をば一念に生ると信じ、行をば一形に勵むべし。また一念を不定に思ふは、念々の念佛ごとに不信の念佛になるなり。その故は阿彌陀佛は一念に一度の往生を當て置き給へる願なれば、念毎に往生の業となるなり。

(勸修傳第二十二又東宗要)

それ淨土に往生せんと思はば、心と行との二つ相應すべきなり。かるが故に善導の釋に、但しその行のみある

は行即ち獨りにしてまた至るところなし。またたゞその願のみあるは願すなほ空しくしてまた至るところなし。必ず願と行と相助けて爲すところ皆な剋すといへり

(往生大要抄) (法語抄八二、八三、八四)

解 説

阿彌陀佛と云ふ名の中には、天地一切の功德が包容されて居ります。功德とは「價值」であり「價值」は「眞實のいのち」であります。ですから「名號をきく」とは「價值」を知ることであり「眞實の生命」を知ることでもあります。此の故に聞き得た以上、何うしても信ぜざるを得なくならねばなりません。若し信じ得ないならば、それは聞き誤つたかであり、知りそこなつたかであります。

ところが、信じさへすれば敢てその名を呼ばなくてもよいではないかと云ふ考へを持つ人が、相當に多いやうで

あります。そんなに何邊も／＼名を呼ばなくてもよいではないかと云ふのであります。一應尤ものやうには聞こえませんが、然しそれはこちらの横着であります。本来から言へば「信ずること」さへいらなと言へるであります。親心と云ふものは子供の心が何んなであらうとも常に心配して居るのであります。それがやくざ者であらうとも、親不孝者であらうとも、子を思ふ親のこゝろには變りはありません。然し「おかあさん／＼」となつて來る子供には一層引かされるであります。子供の方でも「なつかしさ」の餘りに母の名を呼ばずには居られないものがあると思ひます。しかも信すればこそなつかしいのであります。念佛の信仰に致しましてまたこの通りで決してかはりはないと思ひます。人間の感情に變りのあるべき筈はありません。自然の發露として如來の御名を呼ばずには居られないのであります。

何れにせよ。心で思つて居ることが、外に表はれない筈はありません。即ち心行相應と云ふことは信仰ばかりでなく何事にもなくてはならぬことであります。若し「願」と言ふ目標への「心」なくして行爲のみがあるならば、それは丁度馭者のない馬車馬見たやうなもので、何處へ行くの

か分りません。また假にそれを何かでしばつて置くとすればそれは一つところをグル／＼廻つて居るだけであつて何にもなりません。謂ゆる「繫縛」か「放逸」かで、行動はあつても進歩がなく生命がありません。

またこれと反對に「願」があつても「行」がなければ眼ばかりで足がないのと同様に何處にも行くことが出来ません。法然上人在世の時、信の座と行の座とに分けてお弟子達がすはつたところ、法然上人も信の座の方に加擔されたと云ふ話がありますが、これは後世の作り話でありまして間違ひです。信も行も片ちんばになつて居てはいけなないのであります。それはこの御法語で明瞭であらうと存じます。この故に信のみを強調するだけでは不完全であります。

會員通信

謹啓 兎角不順でありました天候も定まりました。

扱て去る七月七日の支那事變記念日に際しまして本校生徒一同自發的に獻金、處分方を依頼して参りましたので教師感激また些少の獻金を加へ別送の金額となりましたので御送附申し上げます。就きましては甚だ僅少ではありますが、國家の爲に傷つかれた御方達への慰問淨土の一部に御加へ下され御慰問賜はらば幸甚に存じ上げます。何卒よろしく御配慮下さいます様御願ひまで

七月三十一日

名古屋淨土教校

敬具

そこに念佛を伴はなくてはなりません。またそれと反對に信をそつちのけにして「念佛せよ」と行の念佛をのみすゝめるのも少しどうかと思ひます。先年ある人の講話の際「念佛するときの心の持ち方は」との聴衆の一人の質問に對して、その講師が「何の心持もいらぬ、唯だ念佛するだけでよい」と返事をなさつて居られました、これでは「行が獨り立ち」になつて本當ではないと思ひました。

昔しも一枚起請文に「たゞ往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の子細候はず」とあるのを楯に取つて「ただ南無阿彌陀佛と申せばよい」と云ふ人もあつたさうであります、それは「たゞ」と云ふ言葉を「申す」とのことの方へつけて考へたからであります。然しながら、この「たゞ」は「疑ひなく往生するぞと思ひ取る」の「思ひ取る」と云ふ方に付けて考へべきものであります。それでなくては次の「別の子細候はず」とか「但し三心四修云云」の言葉の出て来る根據を失ひます。唯だ置かれてある場所が上にあるから、上の言葉の「申す」方へ付けるとするのでは意味をなさぬと思ひます。

小消息の「一念十念に足りぬべし」とありますのは「信」

を固める爲の御言葉であり「無聞に修すべし」とあるのは「行」をおろそかにしてはならない爲の御言葉でありますやうに、實生活上にはその信と行とを二つながら具足せなくてはならないのであります。

また「一心專念」の文には「行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざる者を正定業と名づける」とありますから、一心に念じ續けて居なければ本當ではあるまいなどと思ひ違ひをすれば、一念を不定に思ふのですから一念の繼續は何處まで行つても「不定」でなければならず、また繼續することをよいとするならば、それでは量で行かうとする米國思想と同様なものになつてしまつて、本當の信とはならないのであります。正しくは一念でも正定の業として如來大悲のふところの中に住することが出来るものでなければなりません。

一念に一度の往生があり、念々に往生しつゝあるところそこに願と行、心と行との相應があるのであります。

この故に「一念に信」を盡き「一形に行」をはげむのが本當であります。願行相助け行くことこそ信仰の重要事であり、そしてそれは一切の行爲に於いても必要なことであります。

編輯後記

◇いかにも夏らしい快い天氣がつづきました。誰の顔をみても晴々してゐます。事務所にお立寄りの方からも當會宛の書簡からも「暑い」といふ言葉が一つも聞かれなかつたことは嬉しく思ひました。

◇自分のことより先づ前線を思ひ炎天が續けば稻のことを喜ぶ、ここに云はずと一億一心が感ぜられます。黙々と敢闘する姿に對しお互に合掌してゆきませう。

◇吉田紘二郎先生はますます御元氣にてお慶び申し上げます。

◇長谷川伸先生から皇軍と銃後の發刺たる姿を描いた玉稿を頂きました。深謝いたすと同時に今後とも宜しく御指導の程願上ます。

◇岡本一平先生から前承「とし子を授かる」を頂きました。先生の生活に對する眞剣さがにじみ出てゐます。

◇和田正采先生から御體験の佳話をお寄せられました。濃厚なる青年へのお叱りを深く感じます。結核撲滅への警鐘でもあります。

◇渡邦三氏はこの程南方から歸られたばかりです。北林透馬氏の後をうけてしばらく連載して下さい。

◇編輯の都合上本號だけ歌壇を休ませて頂き、岩野喜久代女史の玉稿を頂きました。各位に厚くお詫びを致し、今後はかゝる失態のないやういたしますから何卒御寛容

の程願ひます。

◇頁の都合で本號から漫畫の頁を廢止いたしました。

◇創刊當時から編輯部で活躍せられてゐた佐賀一海、一瀬直行兩氏と一夕清談いたしました。兩氏とも相變らず御元氣にて會のためいろ／＼助言を頂きました。

◇頁が足りず玉稿が載りきれませんでしたので各位に失禮いたしてゐます。それに編輯上にも無理をしてゐるので見苦しい點があらうと存じます。今後とも勉強してゆくつもりですから御勘辨下さい。(村瀬)

新刊 法然上人を憶ふ (本會で取次ます)

B6版四四〇頁 實費三圓(送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體験を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつとめた。

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

淨土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和八年八月五日印刷納本
昭和九年九月一日發行
(定價十二錢)

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼發行人 眞野正順

東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
配給元 東京都神田區護国町二一九

日本出版配給株式會社
發行所 法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢 (送料一錢)

會費 金一圓五十錢 (送料共)
一ヶ年

強腦強精に光明丸



腦病全身神經
系諸病腦溢血
鼻耳小心恐怖
腦毒症神經痛

主治效能

腦病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、ヒステリー、てんかん、ヒキツケ、小兒麻痺、腦膜炎、腦毒症、腦溢血、高血壓、半身不隨、心悸亢進、耳鳴、逆上、頭痛、頭重、肩首コリ、(性)の鼻病、耳病、多夢悪夢、頭腦力記憶力思考力減退、健忘症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂鬱症、取越苦勞雜念妄想、胃腸障害。

光明丸は腦疾病、神經系統の疼痛や硬直痙攣、動脈硬化高血壓を治療し神經を鎮め腦毒や全身の病毒鬱血等を除去し血行を整へ全身を賦活し種々の不快苦痛なる症狀を取去り眞の安眠に導き強腦強精ならしめ頭腦力記憶力思考力を増強せしめ心身共に健全明快に導く即ち根本原理に即した合理的優秀薬であります。

試供薬と
説明書を
進呈

有名薬店、百貨店、二有り品切、都八直接本舖へ注文乞フ

薬價
大瓶 廿六
中瓶 十
小瓶 五
用日 日 日 日
十五 七 五 三 二

(本舖) 京都伏見いなり山 願成閣
(代理店) 全國一流賣藥卸賣會社

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十八年八月廿日印刷納本・昭和十八年九月一日發行

淨土 第九卷 第九號

定價金十二錢(送料)
外定定價金十三錢